静岡県日中友好協議会ニュース

No. 112
2018. 10

世界農業文化遺産

桑植え・養蚕・養魚の三位一体、湖州の伝統農法

浙江省湖州市に残る伝統農法「桑基魚塘」（そうきぎょとう）は、中国農業部により2014年６月「中国重要農業文化遺産」に認定されていますが、2017年11月、国際連合食糧農業機関（FAO）より、浙江省では第三番目の世界農業文化遺産として登録されました。

これは、今から2500年以上前の春秋戦国時代に誕生した「池の堤に桑を植え、桑の葉を蚕に与え、蚕の糞で魚を養殖し、魚の糞で池の栄養素を高め、その泥を桑の肥料とする」農法であり、自然生態に基づいた循環型農法システムです。2000年頃、化学繊維の普及により、この農法が衰退しましたが、2008年頃から再生の取り組みが行われ、今では再び「桑基魚塘」の景色が蘇っています。

特 集　企業間交流を促進　ビジネスフォーラム

静岡県と浙江省の企業間の交流を進める「静岡県・浙江省ビジネスフォーラム」（両県省主催）が８月27日、ホテルセンチュリー静岡で開かれました。静岡県関係者100名と浙江省関係者100名（浙江省政府代表団、浙江省商務代表団）総勢200名が一堂に会して、両県省の経済政策や投資環境について耳を傾け、理解を深めました。とりわけ、浙江省の袁家軍省長が初来静され、ビジネスフォーラムの席上、「浙江省は改革開放の大門をもっと開くので、浙江省と静岡県の企業間の経済協力が深化することを期待している」と熱く語りました。

浙江省の発展戦略と静岡県の技術にコラボの潜在力

浙江省側を代表して、浙江省の袁家軍省長は、「浙江省は現在『デジタル経済』、『産業高度化・転換』、『開放発展』、『エリア戦略』を重点に産業振興の四大チャンスを捉えており、また外資系企業のプロジェクトの審査許可手続きは“最多跑一次”（全て一つの窓口、一回で済み、日数も最長100日以内）の簡素化、円滑化をはかっており、浙江省への投資環境は非常に整っているので、一帯一路のビジネスチャンスを共有するためにも、多くの静岡県企業の視察や進出を歓迎する。」と述べました。

静岡県側の主催者を代表して、吉林県副知事は「静岡県から浙江省への進出企業が多数あるのに対し、反面、浙江省から静岡県に製造や物流拠点を設けている企業は数社にとどまっているため、静岡県の現状を知っていただくために、今回はフォーラムの前に港湾施設や介護施設等の視察機会を設けたが、成長著しい浙江省から静岡県への投資を期待したい。」ことを述べました。

両県省の経済担当責任者が、それぞれの地域に進出するメリットを紹介しました。静岡県の天野経済産業部長は、輸送機器や模型等世界的なブランド企業の集積や交通の利便性、静岡県が重点的に推進している東部の「ファルマバレー」（医療・健康関連産業の集積）、中部の「フーズサイエンス」（高付加価値食品関連産業の集積）、西部の「フォトンバレー」（光・電子技術関連産業の集積）、「ふじのくにＣＮＦプロジェクト」（新素材ＣＮＦの実用化研究）等のプロジェクトを紹介し、静岡県の優位性をＰＲしました。

浙江省の盛秋平商務庁長は、紹興に進出しているソミック石川、また杭州に進出している友成機工の静岡県企業の成功事例に触れ、又、現在浙江省のデジタル経済は４兆円規模を目指している他、2022年には特色ある農産物産業を育てる計画である等、大規模な経済活動のための環境整備や情報通信技術の普及、外資企業への優遇政策などをＰＲしました。

業種別グループセッション

グループセッションでは、３つの業種別セッションを行い、両県省の医療や介護福祉、製造、情報産業などの企業が事業内容や製品、強みなどを発表し、業務提携の可能性を探りました。

①医療・健康、介護・福祉産業

②製造業

③情報産業、Ｅコマース

業種別セッション終了後、立食形式の交流会が開かれ、個人同士が名刺交換をしたり、業務に関する具体的な話をする機会が持たれ、今後、静岡県の製造技術と浙江省の発展潜在力とによつてビジネスマッチングの機会となり、具体的にコラボに進展していくことが期待されます。

静岡で、両県省トップ会談

川勝平太県知事は、静岡市内で袁家軍省長とトップ会談を行い、径山茶が日本の茶道の起源であり、蘭亭が日本の書道の起源であることなどを話題に親しく懇談するとともに、双方が共に努力し、商業、貿易、製造業、観光、介護養老、社会管理等実質的な交流が進むことに期待を寄せました。

シリーズ　クローズアップチャイナ

改革開放40年、『今』・『昔』　社会保障

ゆりかごから棺桶が激変、新たな社会不安

社会主義計画経済の時代、中国では社会保障制度を構築するという考えはなく、現役労働者はその勤務する国営企業や集団所有制企業の内生する付属病院で病気の治療を受けることになって、国営企業と集団所有制企業は実質的にゆりかごから棺桶に入るまでその従業員の一生の面倒をみていました。農村部の医療は、医師は病院に所属するのではなく、中国政府の機関である人民公社に雇用されていたため、給料は政府から支払われ、その医師にかかるのは無料でした。

それが、改革開放政策によって、企業は市場競争に晒されたことから、国はその経営と直接関係のない社会保障の負担を企業本体から切り離し、社会保障基金を設け移管しました。併せて、養老（年金）、健康保険、失業、労災、出産などの社会保障基準が制定、運用されてきました。2013年の三中全会で採決された決定では、皆保険の整備が明記されていますが、まだ未整備であり、現行の社会保障制度の問題点としては、高齢化の進展に伴い社会保障に対するニーズが高まっていますが、その保障能力は限られていること、都市と農村はそれぞれ別の社会保障制度になっており、不公平感が強いこと、都市部において企業セクターと政府行政機関はそれぞれ別の制度になっており、政府行政機関の職員と幹部は企業セクターの従業員よりはるかに優遇されていることがあり、このような二重社会保障制度のもとで不公平感が強まり、社会不安をもたらす一因になっています。

「看病難・看病貴」が社会問題化

現在の中国における医療のなかで、2007年頃から社会問題となっているのが「看病難・看病貴」問題と呼ばれているものです。これは病院へ行くこと自体が難しく（看病難）、病院にたどり着けたとしても診療にかかる費用が高すぎて十分な医療が受けられない（看病貴）という問題です。中国の社会保障制度はまだ全ての国民に十分に行き届いておらず、資金力のない人は病院にかかれない状況があります。医療分野においても、市場原理が導入された結果、農村部ではこれまでほぼ無料で受けられた医療体制が崩壊、医師の偏在も起こり、「看病難・看病貴問題」は顕著となり、医療が行き届かなくなり、「農村合作医療保険制度」により、この農村部における医療崩壊立て直しが始まっています。

中日友好病院、保健医療サービスの近代化に寄与

1979年に開始された日本の対中国ODAとして、医療の遅れ等の問題を抱えていた中国の保健医療サービスの近代化を進めるべく、1984年10月、北京の郊外に、最新の医療機器、医療設備を備えた中日友好病院が開院しました。また、病院建設と並行して1980年に、医療関係者を対象にした技術協力が始まり、日本全国の医療機関の協力を得て、医師、看護師などが現地に赴き、併せて中日友好病院の医療関係者が日本で研修を受け、カルテの書き方、検査手技、外来診療、手術ノウハウなど、医療技術が移転されました。

中国最前線：今日のキーワード

疾走！中国高鉄　北京－香港が連結

中国鉄道：超高速化を実現

1993年当時、中国の旅客列車の平均速度は48km/hしかありませんでしたが、2011年１月９日、京滬高速鉄道線（北京―上海）での走行試験において487.3km/hを記録しています。

今年９月23日に運行を開始した高速鉄道は、香港から深圳の区間（約26キロ）、深圳―広州間は既に開通しており、約２時間だった香港―深圳―広州の区間（約140キロ）が最短47分（香港域内は最高時速200キロ、本土内は300キロで走行）で結ばれました。香港西九龍駅発の高速列車は、本土内の高速鉄道網に接続し、汕頭、アモイ、福州、南昌、杭州、長沙、武漢、鄭州、石家荘、貴陽、桂林、昆明、上海、北京など44の主要駅と結んでいます。短距離は西九龍駅から福田駅までわずか14分で、広州南駅までは最短47分、最も遠い北京までは最短８時間56分で到達します。

浙江省：高鉄（中国新幹線）で省内１時間交通圏

今年３月９日、杭温線（杭州－温州）の義烏－温州区間が着工し、温州永嘉（温州北）と杭州東駅は僅か65分で結ばれ、義烏と温州は30分で結ばれることになり、省内４大都市（杭州市、寧波市、温州市、金華市）を結ぶ『１時間交通圏』がいよいよ形成されます。

また、杭州市は現在の５本の高鉄路線（杭甬：杭州－寧波、寧杭：南京－杭州、滬杭：上海－杭州、杭長建設中の杭黄高鉄：杭州－黄山、今年10月開通予定）、３つの高鉄駅（杭州駅、杭州東駅、杭州南駅が今年運用開始予定）から、11の高鉄路線、６つの高鉄旅客駅へ（杭州鉄道拠点計画2016－2030）と拡充され、「高鉄の街」へ変貌しようとしています。このような高鉄線路が開通後、杭州は上海、南京（北京）、合肥、黄山、武漢、南昌、温州、台州、寧波等へ９路線が開通し、多くの都市へ向かうことができ、また時間も大幅に短縮されます。

滬乍杭高鉄（上海浦東空港浦東駅－嘉興乍浦－杭州東駅又は杭州西駅）は杭州蕭山空港と結び、また上海浦東空港と結び、既存の滬杭高鉄（上海虹橋空港虹橋駅－杭州駅、又は杭州東駅）と結び、３つの空港が高鉄と連結されます。

浙江人物紀行

慈溪から日本へ　徐福

【徐福　像】

【浙江省慈溪の達蓬山から出発したとされる徐福】

秦の時代の中国に徐福という人がいました。徐福は、長い間中国でも伝説上の人物でしたが、1982年、江蘇省において徐福が住んでいたと伝わる徐阜村（徐福村）が存在することがわかり、実在した人物だとされています。

徐福伝説

秦の始皇帝の時代に、方士（方術を行なった人のこと）をしていた徐福は、秦の始皇帝に不死の薬を献上すると持ちかけ、莫大な資金を得て、紀元前219年に１回目の出航をしたものの、何も得ることなく帰国し、「鯨に阻まれてたどり着けませんでした」と始皇帝に報告しました。そこで、始皇帝は大勢の技術者や若者を伴って再度船出することを許可し、紀元前210年、浙江省寧波市慈溪の達蓬山から、若い男女ら3,000人を伴って２回目の出航をしました。実際、徐福がどこにたどり着いたかは不明ですが、史記の淮南衡山列伝によると「平原広沢の王となって中国には戻らなかった」とされています。一説によると、辿り着いた「平原広沢」が日本であり、彼らにより農耕・製紙等の技術が伝えられたとも言われています。

天下統一後の始皇帝は、神仙の道に心を奪われ、「不老不死」の薬探しに躍起になっていました。万里の長城の建設等で多くの民を苦しめる始皇帝の政治に不満をいだき、新たな地への脱出を考えていたのかもしれません。もしかすると、最初から、徐福は不老不死の薬を持ち帰る気持ちなどなかったのかもしれません。そのため、多くの若者や技術者など3,000人もの人々を集め、秦を出発したとされます。

日本各地に残る徐福伝説

日本各地には徐福伝説が存在しています。実際はどこにたどり着き、どこに居住し、どこに行ったかはわかりません。もちろん、徐福という人物の存在を証明する物もありません。しかし、徐福の伝説地はとても多く、中国から船出した徐福が日本にたどり着き永住し、その子孫は「秦」（はた）と称したとする「徐福伝説」が日本各地に存在しています。

今時の中国の学生

いずこも同じ　大学生活は楽しい！

寧波大学外国語学院外籍教師
（静岡県日中友好協議会　交流推進員）
横　井　香　織

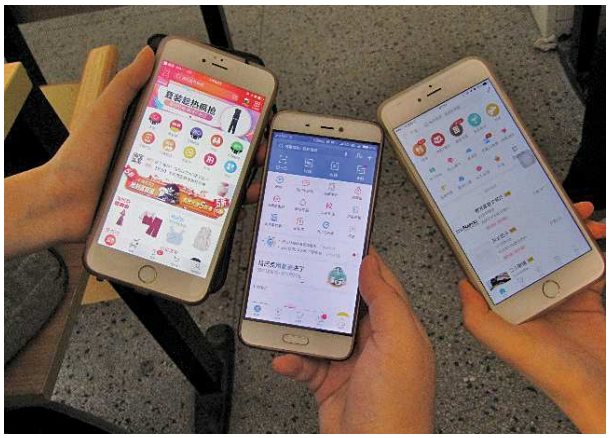
スマホ禁止、男女交際禁止、朝７時から夜10時まで勉強…。これは、中国のある高校のルールです。高校では、勉強漬けの厳しい生活を強いられます。それを乗り越え、みごと大学に入学した学生の生活の様子を、お伝えしましょう。

大学に入学すると、学生はほぼ全員、大学の寮に入ります。寮費は1200元/年（１元＝約17円）で、学費とともに支払います。寧波大学の場合、ほぼ半数の学生は浙江省出身で、他は全国からやってきます。寮は４人部屋で、同じ学部の学生が室友（ルームメイト）です。部屋にはベッドや机が備えられ、トイレ、シャワーもあります。ただしガスがないため、料理はできません。食事は、大学の食堂等で、すべて外食です。（こっそり自分たちで作ることもあるようですが）

学生たちの生活を支えているのは、「農貿」と呼ばれる学生街と、スマートフォンです。「農貿」は、大学に隣接する学生街です。スーパーやレストラン、美容院、ブティック、屋台等100軒前後の店舗があり、いつも学生でにぎわっています。レストランは、地元の料理だけでなく、四川料理や火鍋、麺類、日本食等そろっていて、値段が安く量も多く、お昼時や夕方は、どの店も友人と楽しく会食する学生で満員です。

ある時、「Ａ４のコピー用紙は、どこで買えるの？」と学生に尋ねました。すると、「淘宝です。」「いや、京東の方がいいかな。」と返ってきました。そうです。日用品から衣服、靴、化粧品、書籍、生鮮食品にいたるまで、ありとあらゆるものが、「淘宝」や「京東」等のネットショップで買えるのです。支払いも、スマホで済ませます。早ければ翌日、遅くとも数日中に、大学内外のスポットで商品を受け取ります。そうそう、11月11日は、年に一度のセール日です。今年は何を買うか、そろそろ決めておかないと…。

学生の平均的な生活費は、1500～2000元/月です。アルバイトをしている学生は少なく、親からの仕送りが、学生生活を支えています。



【買い物も支払いも全てスマホで】

【活気にあふれる学生街】

プロフィール：横井香織さん
学歴：静岡大学人文学部卒業、兵庫教育大学大学院博士課程修了、博士（学術）
職歴：静岡市内の公立中学校、県立高等学校に30数年間勤務
2016年に中国へ渡り、中国海洋大学を経て、現在、寧波大学外国語学院外籍教師

歴史の街道
--源 遠 流 長

[無文元選禅師]

奥山方広寺、天台山方広寺とのゆかり

無文元選禅師

無文元選禅師は後醍醐天皇の皇子で、後醍醐天皇が崩御した後に京都の建仁寺で出家し、可翁宗然や雪村友梅等に師事して禅宗を学び、1343年には中国に渡り、福建省の大覚明智寺で、また浙江省の天台山方広寺にも立ち寄りました。

天台山方広寺

浙江省台州市にある天台山方広寺は、1101年に創建、1193年に再建された禅寺で、山中の深い谷合いにあります。方広寺は上、中、下の寺院に分かれており、「石梁」の下側にある下方広寺は古方広寺とも呼ばれ、五百羅漢堂が有名です。「石梁」とは、左右の崖の中間に梁のように渡された天然の岩石で、その下には「石梁飛瀑」と呼ばれる滝が流れ、この辺りに五百の羅漢が現れたという伝説があります。

奥山方広寺

浜松市北区引佐町にある奥山方広寺（臨済宗方広寺派の大本山）は、1371年の創建で、この奥山を治めていた豪族・奥山朝藤が無文元選禅師を当地に迎えて開山しました。無文元選禅師がそこで見た景色が天台山方広寺とそっくりであったため、「方広寺」と名付けました。

奥山方広寺には、無文元選禅師が中国から帰国する時に台風に遭い、船が転覆しそうになった時に、一人の異人が現れて水夫を指揮して禅師を守りました。その異人は禅師が浜松の方広寺に招かれた際に再び現れ、弟子入りしたいと申し出て、禅師の下で修業しました。その姿は僧のようで僧でないような感じだったので、半僧坊と名付けられ、禅師が亡くなった後は、方広寺を守る鎮守様として祀られるようになりました。また、天台山方広寺を訪れたとき、石橋にお茶を献じられたとき羅漢さまが姿を現されたという故事にちなみ、当山に五百羅漢の石像を安置することを発願されました。

発行所：静岡県日中友好協議会　静岡市葵区追手町44－1（静岡県産業経済会館１F）
発行人：栗　原　　績　TEL（054）255－8111